



文明と天災Ⅱ

～なぜ濱口梧陵は「実践的知性」を体現できたのか:その背景としての「対話」と哲学～

2022年6月27日(月) 分科会:人間社会と地球環境

発表者

暁星国際高等学校:シェリン・ミシェル・エリカ、小澤優
上智大学:わけみみのり
聖心女子大学大学院:☆進藤悠佳理



目次

1. はじめに
2. 私たちの視点
3. 「実践的知性」とはどのようなものか：濱口梧陵を例として
4. 「実践的知性」体现者としての濱口梧陵の生涯
5. まとめ
6. 今後の展望



1. はじめに



▲トンガ、津波襲来後の被災地の様子



▲東日本大震災の様子

2022年1月15日

トンガ王国「フンガトンガ・フンガハアパイ火山」が噴火

→太平洋全域で津波が観測

津波等自然災害の身近さを改めて痛感した。



「世界津波の日」と私たちの備え

- 2015年:11月5日を「世界津波の日」と制定

自然災害の教訓を国を超えて共有し、活かすこと

人々の津波の脅威についての関心を高め、必要な対策を推進すること

が期待される

- 私たちの提言:「災害への有効な備えは、教育にあり」

- 「教育」の一側面:現在の変革と未来の創造

→実際に自然災害を体験していない子どもたちをも対象とした
「防災・減災教育」が大切



「防災・減災教育」と「実践的知性」

- 本分科会における検討:

「**実践的知性**」の涵養や「**知性的**」な防災教育が重要(笠原,2019)

- 有効な「防災・減災教育」のキーワードとしての「**実践的知性**」
- 濱口梧陵:「**実践的知性の体現者**」として注目

歴史

哲学



2. 私たちの視点

歴史

哲学



濱口梧陵 <1820～1885>

- ヤマサ醤油 第7代当主
- 「稲むらの火」の事績の主人公。
- 実業家としてだけでなく、
社会事業家としても活躍
- 多岐にわたる活躍は、
「天賦の才」あってこそもの？



濱口梧陵



濱口梧陵と「実践的知性」

私たちの仮説:

「天賦の才」という先天的要素よりも、

青年期までの経験という 後天的要素 の方が

「実践的知性」の涵養・発揮 のファクターになったのではないか？



「実践的知性」の定義

インプットされた体験 / 知識を
適切な場面でアウトプットする知性

その最も顕著な例: 濱口梧陵

歴史

哲学



「実践的知性」の1つの形: 災害伝承を伝える「防災教育すごろく」: 遊戯後の姉妹の様子



3. 「実践的知性」とはどのようなものか : 濱口梧陵を例として



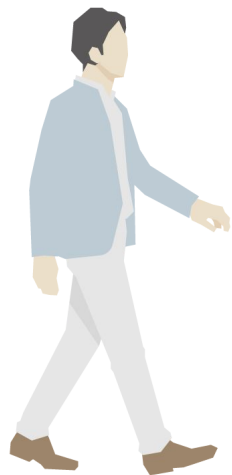
「知能」と「知性」の違い



- 「知能」: 問題を解決する能力 ex. $1+1=2$
- 「知性」: 問題を発する能力 ex. $1+1=2 \Rightarrow 2+1=???$

(ダットン他,2013)

→ 体験から教訓を引き出して、未来の行動を変革する





「実践的知性」とは

- 「実践的知性」:

問題を発して解決のために類推を働かせる

「知性」の行動的な側面

ex. $1+1=2 \rightarrow 2+1=3???$

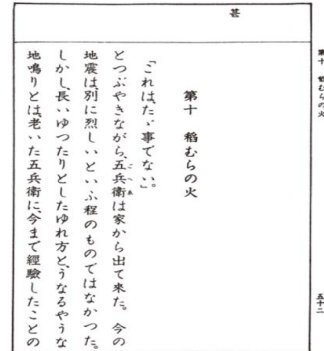
有する知識・経験同士に
繋がりを見出し(類推)、
問題解決に役立てる



「実践的知性」の体現者 としての濱口梧陵

理由①リーダーシップ

理由②生涯を通じて非常事態を
想定し、必要な行動を
実践し続けたこと



出典：濱口梧陵記念館「稲むらの火の館」

https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamura/inohi/siryu_inamura.html



濱口梧陵の事跡

- 防災面** 津波発生時の避難誘導、
広村の復興
- 防疫面** 銚子でのコレラ防疫、
お玉ヶ池種痘所の再建への寄付
- 防衛面** 広村崇義団の結成、
広村稽古場の設立など教育事業



濱口梧陵の事績を支えた「対話」

- 広村の名士・実業家として人々に慕われていた
(リーダーシップを発揮していた)
- 豊富な資料・交友関係等から幅広い知見を得ていた

ために達成された事績ではないか

→周囲や人々との「対話」を重んじていた



濱口梧陵の「実践的知性」の源流

①生育環境

「万が一の時になって、思いをめぐらすのではなく、常日頃から非常事態に備え、一生懸命に我が身を生かす心構えを養うべきである。

住民百世の安堵をはかれ」

(濱口家家訓)

②時代性

幕末：国防の危機と、
政局・大地の激震

1853年 3月

小田原地震

6月

ペリー来航

1854年

安政東南海地震

1855年

安政江戸地震



4. 「実践的知性」体現者としての 濱口梧陵の生涯



「濱口梧陵の生涯」に対する視点

- 「実践的知性」に着目する立場から、濱口梧陵の生涯を概観

→ 主なソース: 『濱口梧陵小伝』(濱口梧陵翁五十年祭協賛会編)

経験によって育まれる「**実践的知性**」が

彼の事跡に繋がったのではないか？



出典: 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1105088/10?tocOpened=1>



『濱口梧陵伝』の興味深い記述

(1) 広村の災害経験

→濱口家の広村での立場と、広村の災害経験について

(2) 華麗なる交友関係とその影響

→激動の時代を牽引した数々の「知性」との交流から受けた影響について



(1) 広村の災害経験 ①

元は漁師町として栄えた広村
(現・広川町)

「海洋の災害多く、天正、宝永両度の海嘯
に会って、戸口こゝろは減少し、土地は荒蕪こらぶ
し、梧陵の少年時代から青年時代にかけて
は、疲弊ほとんどその極みに達した」^[1]



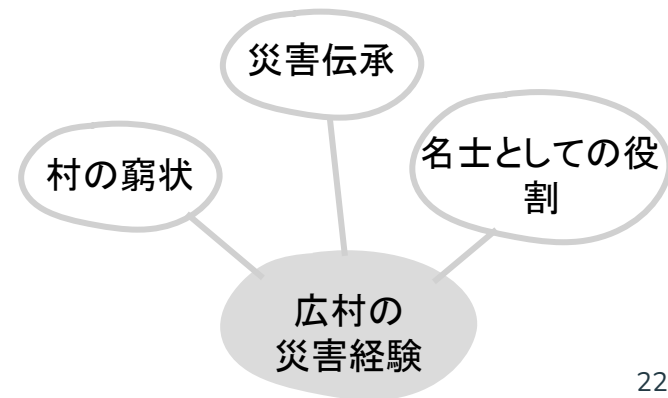
^[1]濱口梧陵翁五十年祭協賛会『濱口梧陵小伝』、昭和年、16頁より引用



(1) 広村の災害経験 ②

- 濱口 梧陵
 - 被災により疲弊した広村に生まれ育つ
 - 地元名士として、村の復興のため、経済的支援や村民の啓蒙活動に尽力

→ 直接被災していなくとも、
広村の災害経験と関わりをもっていた





(1) 広村の災害経験 ③

津波災害経験との1つの大きな接点:「災害伝承」

→ 濱口梧陵手記

「伝え聞く、大震の後往々海嘯の襲い来るありと。依って村民一統を警戒し…」
「濱口梧陵手記」、『濱口梧陵小伝』18ページより抜粋

→ 災害伝承により、津波を予測したことがわかる



(1) 広村の災害経験 を踏まえて

- 「広村の災害経験」との接点→「稲村の火」の行動へ
- 役立つ場面で活用させられる実践的知性には「知る」だけでは不十分



災害経験等を通じ「知った」ことを元に**問題意識を抱き、**
その解決に向けた**「実践」**(=復興支援活動)を行っていた



広村の災害経験との「対話」

- 伝承等を通じ「広村の災害経験」とも「対話」していたのでは
- 自分自身(の知識・経験)と現実問題との対話
という側面も

→ 濱口梧陵の**実践的知性の涵養・発揮の重要な背景**ではないか



(2) 華麗なる交友関係とその影響 ①

- 1820年:満0歳 広村にて、濱口分家の長男「濱口七太」として出生
- 1821年:1歳 実父 七右衛門没(享年22)
- 1825年:5歳 <異国船打払令>
- 1831年:11歳 本家・濱口儀兵衛家の養子になり、「儀太」と改名
広村と銚子の往復生活が始まる
- 1834年:14歳 元服
名を「儀太郎」と改める



(2) 華麗なる交友関係とその影響 ②

- 1841年:21歳 蘭方医・三宅良斎と出会い、蘭学/西洋事情を学ぶ
- 1842年:22歳 <清、大英帝国に惨敗(アヘン戦争の終結)>
<異国船打払令廃止、薪水給与令発令>
- 1850年:30歳 勝海舟(28)と出会う
共に佐久間象山(40)の塾に出入り
- 1851年:31歳 「広村崇義団」を結成
- 1852年:32歳 広村に稽古場設立 (現在の耐久社中学/高等学校の前身)



(2) 華麗なる交友関係とその影響 ③

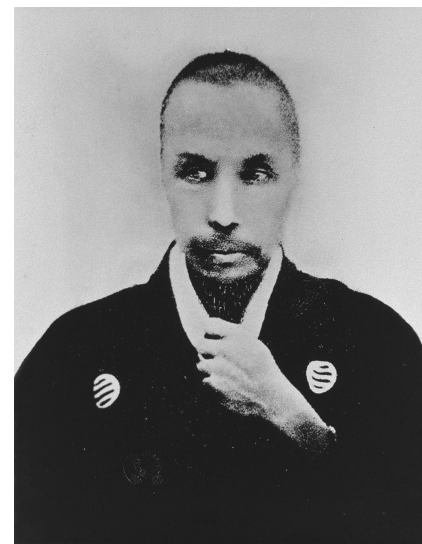
精力的な事跡の背景：多様な叡智との「対話」による刺激と影響



三宅良斎



勝海舟



佐久間象山



「実践的知性」発揮のファクターとしての「対話」

考察：

時代性、人物、伝承との「対話」という刺激的なインプットが
実践的知性の発揮を促すファクターになったのではないか

「稲むらの火」後も残した様々な分野における功績

→それを支えたのは、「実践的知性」ではないか



1853年:33歳 家督相続に伴い、7代目濱口儀兵衛を襲名。
ペリー来航に衝撃を受ける。

1854年:34歳 日米和親条約締結
安政東南海地震津波、「稲むらの火」で村民救済

1856年:36歳 広村堤防の建設に着手
蘭方医の伊東玄朴、三宅良斎の元でコレラ防疫を学ぶ
＜日露和親条約締結＞
＜安政江戸地震発生＞ 江戸の持店が震災に遭う

1857年:37歳 和歌山藩より独礼格を賜る
＜安政台風が江戸を襲う＞



1858年:38歳 <日米修好通商条約締結>

<コレラ流行が江戸に到達>

江戸に関寛齋を送り、コレラ防疫にあたる

江戸神田お玉ヶ池に種痘所設立(同年焼失)

広村堤防完成

<福沢諭吉が私塾(後の慶應義塾)を開く>

1859年:39歳 三宅の要請に応じ、種痘所再建に300両を寄付。

<種痘所が西洋医学所に改名>

医学研究費用として西洋医学所に400両を寄付

1862年:42歳 費用を援助した医学書『七新薬』が出版される

1866年:46歳 広村稽古場を耐久社と命名

1867年:47歳 <大政奉還>



1868年:48歳 <戊辰戦争>

福沢諭吉(34歳)と出会う。

和歌山藩勘定奉行に異例の抜擢。兵制改革の進言を行う。

<明治維新>

1869年:49歳 孔雀之間席並びに参政となる。

<版籍奉還>

和歌山藩小参事となる。

藩校「学習館」の知事として「学則五箇条」を制定。

大広間席学習館知事に抜擢。

洋学校「共立学舎」設立。

1870年:50歳 家督を譲り、梧陵を名乗る。

松坂民政局長、和歌山藩権大参事に就任。



- 1871年:51歳 <廃藩置県>
大久保利通の要請で初代駅逓司(郵政大臣相当)となる。
ち、和歌山県参事となる。 の
- 1872年:52歳 <郵便、戸籍、学制、鉄道、太陽暦等、新職制度が敷かれる>
- 1879年:59歳 国会開設建言の惣代となる
<自由民権・国会開設請願運動が全国で起こる>
和歌山県議会初代議長就任。優れた手腕で議会を協調に導く。
- 1881年:61歳 銚子汽船株式会社を設立する。
- 1884年:64歳 米国に渡る。
- 1885年:65歳 ニューヨークにて永眠。福沢諭吉、勝海舟らが会葬を営む。



5. まとめ



まとめ

- 濱口梧陵の生涯：
「**実践的知性**」を体現し「我が身を生かす」
- 実践的知性：
過去の事例から積極的に類推を働かせ、実践に繋げる知性
防災・減災において極めて重要
- 濱口梧陵の実践的知性：
生育環境 や 時代性と関わって涵養
重要なファクターとしての「**対話**」

濱口梧陵は、**各方面との「対話」を行っていたからこそ**
実践的知性の体現者となったと考えることができる



6. 今後の展望



今後の展望

- 今回:防災・減災教育の重要なファクターとして「実践的知性」に着目
→濱口梧陵を例に、「実践的知性」の涵養と発揮の背景に迫り、
「対話」というキーワードを得た
- 今後:「実践的知性」を普遍的に涵養する方法や
そのファクターについて検討
→人文科学の領域からも世界中の人々を対象とした減災・防災に貢献したい



参考文献

- 杉村広太郎『浜口梧陵小伝』、1934年、浜口梧陵翁50年祭協賛会編
- 翠村隠士「紀州藩学の変遷を略述し浜口梧陵の学風に学ぶ」、『紀州文化』1と2、1956年。
- 府川源一郎『稲村の火の文化史』、1999年、久山社。
- 笠井哲「『稲村の火』における防災の思想について」、『福島工業高等専門学校 研究紀要』第53号、2012年。
- ダットン他「特集特別企画:『シンギュラリティの時代:人を越えゆく知性ととともに』」人工知能学会誌28巻3号、2013年
- 詹小紅「デューイ教育哲学における習慣(habits)と知性(intelligence)の関係」、早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊19号、2012年
- 出久根達郎『津波から村民を救った「稲むらの火」濱口梧陵』総力特集英雄・豪傑でなくても尊敬される日本人;世界に誇る日本人20 part. 2、2011年
- 笠原正大「日本の防災教育における環境学習の重要性」Tsunami, Earth, and Net Working1巻, pp.146-149, 2020



文明と天災Ⅱ

～なぜ濱口梧陵は「実践的知性」を体現できたのか
:その背景としての「対話」と哲学～

Thank you for listening !

ご清聴ありがとうございました！